



Title	ワークショップへの感想文③ 緊縛シンポ事件の伏線 ： 構造的責任を考える
Author(s)	大隈, 楽
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 119-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86369
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワークショップへの感想文③ 緊縛シンポ事件の伏線——構造的責任を考える

大隈 楽

今回の WS は考えさせられる問いを多く突きつけられた。研究の持つ加害性の問題について、重要な指摘がいくつもあった。「生きた人間を対象として誰かの人生に介入するならば、真摯な問題意識が最低限必要」という当然のことが、「緊縛シンポ」関係者には不足していたのではないかとの認識を持った。

WS における言動によって、「緊縛シンポ」の主宰者側の責任が重いことは明白になったように思われる。動画が未だに公開されているというごく基本的な事実すら確認していないにもかかわらず、当初、問題となった事柄への謝罪の求めに応じず、「指摘」をしようとしたのは、「マンスプレニング」の事例であるようにすら感じた。

ただ、この事件の責任には構造的なものがあるとも考えている。「緊縛シンポ」事件を主催した京都大学の「人社未来形発信ユニット」の一連のイベントをその多大な広告を通じて少なからず目にしてきた学内の人間としては、さもなりなんと感じてしまうからである。

当該ユニットは、2017年に京都大学が「指定国立大学法人制度」に応募する際に、その構想の中で「国立大学改革強化推進補助金を活用する取組」として盛り込んだことに由来する¹。同年、京大が指定国立大学法人に指定されると、新たに設けられたポストであるプロボストを中心として構想の具体化は進められ、ユニット発足に至った。ユニットが旗揚げの公開イベントを開いたのは2019年4月。その時の公開シンポジウムは「アジア人文学の未来」と題したものだ。しかし、そこでは、過去の帝国大学の学術研究がいかなる加害性を有したのか顧みられることはなく、蓄積した「伝統」を称揚し「未来」を唱える場となっていた²。一連のシリーズではこのほかにも、「アジア人文学とクィア」と題した回も開かれ

¹ 「京大流経営改革の推進～指定国立大学法人構想に基づく機能強化～」

(https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/10/19/1410224_1.pdf)

² 「人社未来形発信ユニット 第1回全学シンポジウム「アジア人文学の未来」を2019年4月27日に開催します。」(<https://ukihss.cpi.kyoto-u.ac.jp/1558/>, 最終閲覧: 2021年10月7日)。少なくともイベントに至るまでの宣伝・広報までの段階で、そう言った反省は見受けられなかった(その点については、「〈緊急企画〉「アジア人文学の未来」を語る前に」(京都大学新聞2019年4月16日)で批判されている)。そして、プロジェクトに関わった文学部の教員に個人的に話を伺ったところでは、そうした批判は企画段階で出てはいたものの、上層部の意向で無視されたとのことであった。しかし、本号刊行後、2019年4月に開催されたイベント「アジア人文学の未来」の他の部分は指摘の通りであるが、「フ

ている³が、人選も含めて、「誰の語りを優先するか」という問題に対して誠実に思考しているようには思えなかった。イベント自体や研究者が「注目される」ことの方が、真摯なアウトリーチよりも優先されていたと感じざるを得なかった。そのため「緊縛シンポ」の問題点が報道されたときには、ある種の必然性を感じた。

シンポで起こった研究不正について、背景も含めて詳細に検証される必要があるのではないか。

(おおくま・がく)

「ワールド人文学の可能性」では、フィールドワークの主体がホモソーシャルであることや、対象化されている植民地空間が女性化されていることの問題が指摘されていた旨についての指摘があった。そうした問題提起がシンポ内でなされていたことは刻んでおきたい。

³ 「Queer Visions in East Asia—アジア人文学からクィアを考える」
(<https://ukihss.cpiet.kyoto-u.ac.jp/2253/>, 最終閲覧：2021年10月7日)